

文学の自立を求めて

今日の中国文学を読む

高島俊男著

日中出版

高島俊男 (たかしま としお)

1937年生まれ

東京大学経済学部・同文学部卒業

同大学院人文科学研究科修了

東京大学文学部助手を経て

現在、岡山大学文学部助教授

専攻 中国文学

著書 「李白と杜甫」(1972年 評論社)

「声無き処に驚雷を聴く」(1981年 日中出版)

住所 岡山市津島西坂2-3-21

文学の自立を求めて 今日の中国文学を読む

1983年10月5日 第1刷©

〈検印廃止〉

定価はカバーに表示してあります。

著者 高島俊男

発行者 柳瀬宣久

発行所 株式会社 日中出版

東京都千代田区西神田1丁目3番6号 三崎町ビル

振替東京 5-186748 電話 03(292)8720・8721

編集・校正 矢田智子

印刷所 中和印刷株式会社 カバー・表紙印刷 樹ケイエムエス

ISBN4-8175-1113-3 C0098

文学の自立を求めて

今日の中国文学を読む

高島俊男著

文学の自立を求めて
* 目次

「文学」の大道をめざして……………	7
変貌する都会の青年像——張抗抗『夏』ほか……………	17
僻地の農民たち——何士光『郷場にて』ほか……………	24
『苦恋』批判はじまる……………	31
検閲をめぐる紛糾——祖慰『ああ長上たち兄弟たちよ』……………	37
傷痕文学の極北——張賢亮『邢老人と犬』ほか……………	43
軍の発言力示す——第三回短篇小説コンクール……………	49
愛国主義・意識の流れ——第三回短篇小説コンクール(続)……………	56
教条に挑戦する批評家王若望……………	62
「文革」後文学の収獲——中篇小説コンクール……………	68
「自由化」文学とそのゆくえ……………	76
「地主」の恋を描く——『ああ人間……………』……………	83
『苦恋』で白樺が自己批判……………	90
映画界も「冬の時代」へ……………	97

『歌徳と缺徳』から反共文学へ——李劍の変貌……………	103
にがい反省の上に——最近の李准……………	110
めだつ「昔がえり」志向——一九八一年の『人民文学』……………	117
文学青年たちの意欲作……………	123
新人激励の催し——第四回短篇小説コンクール……………	130
「ブルジョア自由化思潮」批判を強化……………	137
「翔んでる女」の愛の遍歴——『春の童話』……………	144
ヒューマニズムの回復を——『人間よ、人間！』……………	151
中国を代表する作家——王蒙……………	158
「文学」とよぶにあたいする作品——賈平凹……………	165
活躍する女性作家たち……………	172
中国の良心のあかし——一九八二年の『人民文学』……………	179
あとがき……………	187
一九七九～一九八二年 中国文学年表……………	204

「文学」の大道をめざして

「一九七九年」の巨大な意義

一九七九年——この年は、中華人民共和国の文学が、巨大な前進と拡大をとげた年でした。将来の文学史家は、この年の意義を特筆大書するにちがひありません。

まず、この年にいたるまでの経過をざっとふりかえってみましょう。

中国の文学はつねに、政治の動向と深くかかわりあっています。

一九七六年九月に、事実上中国の帝王であった毛沢東が死に、翌十月、その側近グループであった「四人組」が逮捕され失脚しました。毛沢東が晩年の全精力を傾けた「プロレタリア文化大革命」（以下「文革」と略します）は失敗のうちに終りを告げ、「文革」の宣伝武器であった、「四人組」指揮下の文学も潰滅しました。

毛沢東のあとをついで政権を握ったのは華国鋒でした。華国鋒は、毛沢東死後の権力争いで、毛未亡人の江青を頭とする「四人組」と決裂はしましたが、基本的には毛沢東の「階級闘争をかなめとする」路線を踏襲しようとはしました。一九七六年十月から、「三中全

会」が開かれた一九七八年十二月までの二年あまりが「華国鋒の時代」です。

この華国鋒の時期の文学、言いかえれば一九七七年・七八年の文学は、過渡期の文学です。この時期、中国の文学は、「文革」中の疲弊から徐々に立ちなおり、数多くの文学者が復活し、文学雑誌がつきつぎに復刊・創刊され、発表される作品も数を増してきました。しかし、作家たちはとまどっていました。「文革」文学が終ったことはたしかだが、毛沢東路線は基本的につづいているので、どういう文学が求められているのか、現われようとしているのか、わからなかったのです。結局この時期に書かれた作品の大多数は、「文革」文学と同じパターンの路線闘争文学でした。ただ、「文革」中のものは、「走資派」が悪玉でしたが、こんどは、「四人組」が悪玉になったというだけのちがいです。この兩年の作品のほとんどすべては、今日すでに何の意義も持っていません。中国においてもその存在は否定されています（主たる理由は、たいていの作品が「英明な領袖華主席」などの文字を含んでいるからであるようです）。

ただしこの時期、一九七七年の十一月に、劉心武の短篇小説『クラス担任』が現われたことは、注意しておかねばなりません。この作品は、「文革」そのものは基本的に肯定しながらも、「文革」が生み出した畸形的な少年少女を批判的に描くことによって、「文革」後文学の一つの可能性を指し示しました。

「文革」によって不利をこうむった共産党幹部たち——その代表が鄧小平です——は、一九七七年以後着実に復活し、一九七八年にはすでに華国鋒をおびやかす勢力に成長しました。彼らは、一九七八年五月に発表した論文『実践は真理を検証する唯一の規準である』をきっかけにして、華国鋒を代表とする「文革」受益者勢力に「真理論争」をいどみました。華国鋒らが「真理を判定する規準は毛沢東主席の指示である」と主張したのに対し、鄧小平らは「真理を判定する規準は実践である」と主張しました。その意図は、十数年来の実践の結果を見れば毛沢東路線の破産は明らかであるという事実を直視しようという点にありました。前者は「毛沢東主席の指示はすべて守る」という立場をとったため「すべて派」とよばれ、後者は「実践派」とよばれています。「真理論争」は「実践派」が勝利しました。

こうした機運のなかで、文学の分野では、一九七八年の八月に、盧新華の短篇小説『傷痕』が、ついで九月には、王亞平の短篇小説『神聖な使命』が出てきました。これらは、「文革」が、中国の人たちの生活に、また精神にのこした深いきずあとを鋭く告発したもので、大きな社会的反響をひきおこしました。さきの『クラス担任』とあわせて、この種の作品を「傷痕文学」とよんでいます。以後、続々と「傷痕文学」が出てくることとなります。

「傷痕文学」は、「文革」の被害のみを描いて、なぜ「文革」のような大災厄がおこりえたのか、という、社会主義中国の根幹に触れる問題を回避している点、また、中国共産党が発動・推進した「文革」を、「四人組」という陰謀集団の行為に歪小化している点など、大きな限界を持っていますが、ともかく、「文革」を否定的にとらえ、民衆のがわに立ってこれを告発した点に意義がみとめられます。

三中全会と近代化路線

一九七八年十二月に、中国共産党第十一期中央委員会の第三回全体会議（略称「三中全会」）が開かれました。この会議は、社会主義中国の進む方向を百八十度転換するほどの、きわめて重大な意義を持つ会議でした。毛沢東の階級闘争路線は事実上放棄され、「四つの近代化」路線が、以後の党と国家と人民の進む方向と定められました。

「四つの近代化」とは、農業・工業・軍備・科学技術の四つの分野で、先進資本主義諸国のあとを追い、そのレベルに追いつこうという路線です。これに対して、先進諸国に学ぼうというのならば、自由・民主主義・人権などという「社会の近代化」も学ばねばならぬだろう、という考えが出てきたのは当然でした。一九七九年の初頭、こうした「もう一つの近代化」「五つめの近代化」を求める動きが澎湃としておこってきました。中国共産党は、これに対して苛酷な弾圧を加えました。一九七九年三月に、民刊雑誌『探索』の編

11 「文学」の大道をめざして

集長魏京生が逮捕され、やがて懲役十五年の刑を言いわたされたのをはじめとして、全国の民主運動家たちは、短期間の言論活動ののち、ことごとく逮捕され、重刑を課されました。こうして、中国の近代化路線は、当初から、物質的・技術的方面だけの近代化をめざす片肺飛行となりました。

「五七年右派」の再登場

中国共産党は、しかし、文学界に対しては、寛容な態度を示しました。伝統的に、社会に占める文学の位置が重く、また文学と政治とのかかわりが強い中国にあっては、文学は、政権の大切な宣伝機関です。三中全会において事実上中国の政権を掌握した鄧小平らの「実践派」は、党内・社会内になお根強い「すべて派」の影響力とたたかうためにも、「四つの近代化」にむけて国民を動員するためにも、ぜひとも文学界の協力が必要でした。その協力を獲得するために、党は、ある程度の文学の自由を許容したのでした。

こうして、一九七九年から翌八〇年にかけての中国文学は、空前の活況を呈することになりました。

この時期の文学をになった作家たちを四つのグループにわけることができます。

一つは、一九七〇年代の前半、つまり「文革」末期から書き出していた人たちです。江青らは、「文革」推進の宣伝員として、若い、才能ある書き手の発掘・養成に力を入れて

いました。こうした人たちが、「文革」終結後その立場を転換して、「文革」後文学のない手の一角を占めました。諶容、劉心武、賈平凹、蔣子龍などがそれです。

一つは、「文革」後に文壇に登場した人たちで、盧新華、張潔、張抗抗などです。

一つは、「文革」で打倒されていて、一九七七年から七八年にかけて復活した人たちです。人数が大量なわりには、「文革」後の仕事はあまり目立ちません。抜群の働きを示したのが茹志鵬、それに巴金、李准、馬烽などがあります。

最後の一つが、一九五七年の「反右派闘争」で打倒され、二十年余の沈黙を破って再登場した、いわゆる「五七年右派」の人たちで、この人たちが、一九七九年・八〇年の中国文学界の中心になりました。また、この人たちが出てきたからこそ、この時期の文学は、空前の活況を呈することができたのでした。王蒙、劉賓雁、白樺、劉紹棠、張賢亮、方之、陸文夫等々です。

この時期の、比較的注目すべき文学作品は、おおむね三つに分けることができましよう。

第一は、「傷痕文学」を越えて、共産党独裁下の中国社会の体質に迫ろうとするもので、「生活に干預する文学」（現実に関与する文学、の意）とよばれました。劉賓雁の報告文学『人妖の間』、白樺の中篇小説『ああ、古い航道』および映画シナリオ『苦恋』、沙葉新らの戯曲『もしぼくがほんものだったら』、王靖のシナリオ『社会の檔案のなかに』

などが代表的なものです。「傷痕文学」が「文革」の惨禍だけを問題とするのに対して、これらは、今日にまで一貫する党の体質に切りこんでいるのが特色です。

第二は、人間の尊厳を訴える文学、ヒューマニズムを主張する文学です。ヒューマニズムの主張とは、これまでの中国において、日常生活の場へもちこまれた階級闘争が人間性を踏みにじってきたことに対する抗議ですから、第一の種類の作品と重なる性格があります。諷刺『人、中年に至れば』、劉心武『如意』、雨煤『ああ、人間……』、それに戴厚英の長篇小説『人間よ、人間！』などが代表的なものです。

第三は、新しい手法を試みる文学、あるいは、推理小説・SFなど楽しみのための文学、といった、総じて西欧的・自由世界的関心に傾いた文学です。

こうして一九七九年の中国文学は、作家の隊列の点でも、作品の内容の点でもいちじるしく拡大し、熱気のうちに四文代を迎えました。

四文代から『苦恋』批判まで

中国文学界の高潮した気分がピークに達したのが、一九七九年十月末から十一月半ばにかけて開かれた、四文代（第四次文学芸術工作者代表大会）でした。鄧小平が初日出席して祝辞をのべ、政治が文学に干渉しないことを約束して、参会者たちの熱烈な喝采を受けました。劉賓雁、白樺、王蒙などの「五七年右派」が演壇上でスポットライトをあびま

した。しかし白樺がこの時の演説で「自由が許された時には入獄の準備をしなければならぬ」とのべたように、鄧小平の約束は久しからずして反古になります。

先にあげた各種の傾向の文学のうち、政権にとって最も危険なのは、いうまでもなく「生活に干預する文学」でした。中国共産党は、一九八〇年はじめに「劇本創作座談会」を召集して、『もしぼくがほんものだったら』『社会の檔案のなかに』などの上演上映を禁じました。これによって、演劇と映画は、社会批判の機能を奪われ、沈滞期に入りました。

しかし、小説と詩の分野では、一九八〇年中も、なお社会批判的作品が発表されつづけてきました。

そこで中国共産党中央は、一九八一年の二月に、七号文件『当面の新聞・雑誌・放送の宣伝方針に関する決定』を下達して、文学が社会の暗黒面を暴露することに対して歯どめをかけ、さらに、同年四月の『解放軍報』による『苦恋』批判を受けて、七月以降、党中央が直接『苦恋』批判にのりだして、いわゆる「ブルジョア自由化」の傾向を厳しくおさえこみました。同年秋には、白樺自身をはじめ、掲載誌『十月』の編集部、文聯（文学芸術界の連合組織）、國務院文化部などが次々に自己批判し、白樺は一九八二年はじめに雲南へ下放されました。こうして中国の文学界は、一九八一年いっぱい、さらに八二年前半にかけて、重苦しい雰囲気におおわれ、創作活動は停滞しました。

返す刀で左をたたく

ところが一九八二年半ば以降、中国共産党中央は、雲南に下放されていた白樺をよびもどして全面的に創作活動を再開させる一方、『苦恋』批判の火ぶたを切った『解放軍報』と解放軍総政治部の整頓をはじめました。すなわち『解放軍報』八月二十八日の趙易亞の論文『共産主義思想は社会主義精神文明の核心である』を、極左偏向であるとして、一か月後に編集部に自己批判させるとともに、総政治部主任の韋国清を更迭したのです。同年暮には、『解放軍報』とともに『苦恋』批判の先頭に立った『時代の報告』誌が、自己批判して編集部への入れ替えに追いこまれます。

結果として見れば、鄧小平は、一九八一年には右を斬って左の顔を立て、一九八二年には左を叩いて右の歓心を買ったのでした。このことは、共産党の極権政治であるゆえに自由を求める知識人の支持を得られず、資本主義的経済路線をとるゆえに毛沢東路線に執着する党・軍幹部と相容れない、という鄧小平政権のディレンマをよくあらわしています。

社会や人間ありのままに

右のような状況のもとで、一九八二年の中国文学界は、相当に生色をとりもどしました。もとより、「生活に干渉する文学」はもうありません。階級闘争的人間観に異議を唱え、声高にヒューマニズムを主張する作品もありません。代りに、社会や人間を、ありの